

美術の中のかたち 一手で見る造形

触りがいのある犬 — 中ハシゲ

県美プレミアム
館外作品による小企画



1) 制作途中の「触りがいのある犬」に触れる

県美プレミアムⅡ

2018年7月7日(土) - 11月4日(日)



2) 福田翠光《鶴(カフノツル)》1940年 絹本着彩

県政150周年記念
ひょうご
近代150年

収蔵品でたどるひょうごのあちこち、
150年のあの時この時

県美プレミアム
収蔵品によるテーマ展

県美プレミアム 小企画=館外作品を中心とした小企画展 特集=収蔵品によるテーマ展

兵庫県立美術館は、前身の近代美術館時代から数えて約45年にわたり収集活動が続け、現在10,000点を超える作品を収蔵しています。それらは収集方針を反映して、国内外の近代彫刻と版画、日本近代の名作、兵庫ゆかりの作品、関西の現代美術に大別されますが、内容は実に多岐にわたり、一瞥しただけではその総体をとらえきれません。そこで、当館では、1年を3期に区切り、個々に展示のテーマを設けることによって、横断的にコレクションを紹介し、変化に富んだ常設展示をおこなっています。

開催情報

県美プレミアムII

小企画 「美術の中のかたち一手で見る造形 触りがいのある犬—中ハシクシゲ」

特集 県政150周年記念「ひょうご近代150年

～収蔵品でたどるひょうごのあちこち、150年のあの時この時～」

- 会 期** 2018(平成30)年7月7日(土)―11月4日(日)
- 開館時間** 午前10時―午後6時(特別展開催中の金・土曜日は午後8時まで)
入場は閉館の30分前まで
- 休 館 日** 月曜日(ただし7月16日、9月17日、9月24日、10月8日の祝日・振替休日は開館、
7月17日、9月18日、9月25日、10月9日の火曜日は休館)
- 会 場** 兵庫県立美術館
(〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1 TEL:078-262-0901 <https://www.artm.pref.hyogo.jp>)
常設展示室4(小企画「触りがいのある犬—中ハシクシゲ」を開催)
常設展示室1、2、5、6、小磯良平記念室、金山平三記念室(特集「ひょうご近代150年」を開催)
- 観 覧 料** 一 般：500(400)[300]円／大学生：400(300)[200]円／70歳以上：250(200)[150]円／
高校生以下：無料
*()は20名以上の団体料金/[]は特別展とのセット料金
*70歳以上は一般料金の半額
*障がいのある方とその介護の方1名は無料
*毎月第2日曜日は公益財団法人伊藤文化財団のご協力により無料で観覧できます。
*7月12日～16日は県政150周年事業 美術館・博物館無料開放事業により無料で観覧できます。



1) 制作途中の「触りがいいのある犬」に触れる

美術の中のかたち 一手で見る造形

触りがいいのある犬 — 中ハシゲ

県美術館
による小企画

主催：兵庫県立美術館

後援：公益財団法人伊藤文化財団、兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、兵庫県社会福祉協議会、神戸市社会福祉協議会

本展のみどころ

お手触れ OK

美術館の展示品に手で触れて鑑賞できる展覧会です。

触覚的な彫刻とは？

いくら触覚的要素が強くとも、あくまで視覚芸術の一分野である彫刻。本展では、従来の目に頼った彫刻表現に熟達した作家が、視覚を遮断し、触覚のみで造形することで、視覚障害のある人にとっても、ない人にとっても新鮮な、かつてない彫刻を生み出すことを試みます。

中ハシゲの実験的最新版

松や力士といった日本的題材のポップでキッチュな金属彫刻や、「ゼロ・プロジェクト」等で知られるベテラン作家・中ハシゲ（次項参照）が、これまでの作風とは全く異なる実験的な新作に挑みます。

関連事業

アーティスト・トーク＋対談

「触覚が生み出す作品とは」

出品作家が展示作品の制作過程を紹介するとともに、全国各地のミュージアムを訪れ木彫も手がける目の見えない人と、彫刻と触覚をめぐって対談します。

講師：中ハシゲ氏（出品作家）、
小原二三夫氏（日本ライトハウス情報文化センター）

9月1日（土）午後3時～午後5時
当館レクチャールームにて（定員100名）
聴講無料

*兵庫県立美術館「芸術の館友の会」会員優先
座席あり

本展の予告動画を YouTube で配信しています（当館ホームページでも配信予定）。<https://youtu.be/xMsBYjaTruw>

開催趣旨

当館では1989（平成元）年より、作品に手で触れて鑑賞できる「美術の中のかたち一手で見る造形」というシリーズ展を、ほぼ年一度のペースで開催しています。見えない人、見えにくい人にも美術鑑賞の機会を広げる目的で始まり、回を重ねる中で様々なアプローチを通じ視覚優位の美術鑑賞のあり方そのものを問う機会ともなってきました。

こうした展示を続けていると、「彫刻家は手でかたちを作っているのだから、彫刻には手で触れないとわからない」という声を耳にすることがあります。なるほど、しかし本当にそうでしょうか。確かに彫刻家は触覚を大事にしつつ、でも最後はあくまで目で見てかたちを決めているはず。とはいえ、「手で見る」鑑賞が目で見るとは別種の豊かな経験であることもまた事実でしょう。手で見てこそわかる彫刻の魅力が確かにあるとして、ではそれが一体どのようなものなのか、実は私たちはよくわかっていないようです。

シリーズ29回目となる今年は、中ハシクシゲ（1955-）を出品作家に迎え、彫刻における触覚的なものとは何かという根本的問題を改めて考えます。常にユーモアを漂わせつつ彫刻の本質に斬り込む作風で知られ、近年は粘土による塑造制作に力を注ぐ中ハシが、日々触れあっている愛犬をモチーフに、視覚を遮断し、触覚だけで造形することを試みます。

見た目を度外視した作品ゆえ、見ごたえはないかもしれませんが。でも、触れば確かに生き生きと感じられる、そんな「触りがいのある彫刻」は、見えない人にも、見えにくい人にも、見える人にも、きっと新鮮な驚きを与えてくれるでしょう。

作家紹介



参考）触覚による制作風景

中ハシクシゲ

1955年香川県生まれ

現在、滋賀県大津市在住

京都市立芸術大学教授（彫刻）

東京造形大学で佐藤忠良に彫刻を学ぶ。1980年代、身近な人物や動物をモデルにした具象的なブロンズ彫刻から出発。1990年代に入り、松や板塀など日本的モチーフを扱ったポップでキッチュな金属彫刻で注目を集める。1990年代末からは、プラモデルのゼロ戦を接写・拡大した写真プリントを貼りあわせたハリボテの戦闘機を展示・焼却するという「ゼロ・プロジェクト」を国内外で展開。近年は、自身の原点である塑造に立ちかえり、粘土による実験的な制作を続ける。何度か大きく作風を変化させつつも、明治期に西洋流の彫刻を移植した、いわば彫刻なき国・日本の彫刻とは何かを一貫して問い続けている。



参考）Nippon cha cha cha. 1993
 Bronze h305cm



参考）ZERO project SUISEI-43,
 Tottori, 2007. Photographs
 w1100cm

県政150周年記念 ひょうご 近代150年

収蔵品でたどるひょうごのあちこち、
 150年のあの時この時

県美プレミアム
 収蔵品によるテーマ展

主催：兵庫県立美術館

後援：公益財団法人伊藤文化財団



2) 福田翠光《鶴（カフノツル）》1940年 絹本着彩

開催趣旨

本年は、兵庫県が設置されて150年目にあたります。これを記念して開催する本展では、兵庫県立美術館収蔵品によって、「ひょうご近代」の150年を振り返ります。

旧国名でいうところの但馬、丹波、播磨、摂津、淡路の5つの地域を擁し、日本海と瀬戸内海を臨む兵庫県は、文化・芸術の分野でみると、広い県域と多様な風土を反映した多彩な人材を数多く輩出しています。また、開国以来の港をかかえ、各地域に小さな中心が存在する当県には様々な人々が往来し、そのことが大きな刺激になったと推察されます。

本展では、150年の時空を自由に行き来し、具体的な「あの時」や「この時」、「あちこち」や「そこ」や「ここ」といった具体的細部に目をこらして用意したトピックごとに作品を展示することで、「ひょうご」を再発見してみたいと考えています。

本展のみどころ

- 県内各地を描いた作品を展示。そうだったのか！この絵はココやアソコを描いているんだ！お住まいの地域の好感度が一挙にUP!
- 会場では、150年の「本当」だけでなく、小説などに出てくる「虚」のできごととも紹介しながら、ひょうごのイメージを探ります。
- 美術の「中央」である東京とは違う、もうひとつの真ん中である京都とも違う、ましてや大阪、和歌山とも全然違うひょうごならではの美術の姿を発見できるかも？
- 当館が昨年度、新しく収蔵した作品も、お披露目！（新収蔵品にはキャプション横に「※」をつけています）

トピック1 兵庫県が、できた！

1868（慶応4・明治元）年5月にはじめて設置された兵庫県は、開港した兵庫を中心とする、現在よりずっと小さいものでした。では、現在兵庫県であるその他のところは、いったい何県だったのでしょうか？ちなみに、初代知事は伊藤博文で、その名は現在の神戸市中央区にある地名「伊藤町（いとうまち）」に残っています。

【常設展示室1】



参考）小松益喜《元居留地風景（伊藤町）》1939年
 油彩・布

トピック2 県鳥はコウノトリ

花はノジギク、木はクスノキ、鳥はコウノトリ。これらは兵庫県のシンボルです。本セクションでは、県鳥コウノトリ（1956年、特別天然記念物に指定）を描いた作品を展示するとともに、シンボルではないものの、全国的に絶大な知名度を誇る明石のタコが重要な役割を果たす島袋道浩（1969- ）の作品を展示します。

【常設展示室1】



3) 島袋道浩《そしてタコに東京観光を贈ることにした》
 2000年 パフォーマンス/ビデオ・インスタレーション ©Shimabuku ※

トピック3 エキゾチック KOBE

慶応3年12月7日（西暦でいえば1868年1月1日）、神戸開港。えっ！開港したのは兵庫ではないの？というややこしい話はさておいても、外国と直接交通できる港を擁し、外国人居留地が設けられた神戸は爾来エキゾチックな町です。「舶来」という言葉も魅惑的な KOBE に関係する作品を紹介します。

【常設展示室1】



4) 川西英《古道具屋》1941年 木版・紙

トピック4 描かれたひょうご（1）木々を見つめる日々

県内の「ある場所」と関係する作品を展示しますが、作品本位でいうと「それがどこか」ということは余り問題ではないでしょう。作者の内的な何かや、ものの見方、絵を描く手法やイメージの出現に対する問いかけなど、ここでは「ひょうご」とは別なことを感じ考える必要がありそうです。

【常設展示室1】

トピック5 描かれたひょうご（2）姫路・明石・西脇

トピック4と同様、県内の「ある場所」に関する作品を展示します。しかし、トピック4の作品とは異なり、描く作者にとっても見る私たちにとっても、より重要なことは「どこを描いているか」ではないでしょうか。

【常設展示室1】【常設展示室2】

トピック6 描かれたひょうご（3）震災

1995（平成7）年1月17日に発生した阪神・淡路大震災に関連する吉見敏治（1931- ）、西田真人（1952- ）、福田美蘭（1963- ）の作品を展示します。

【常設展示室2】



5) 吉見敏治《JR新長田駅前（神戸市長田区）》1995年
木炭、コンテ、パステル、水彩、グアッシュ・紙 ※

トピック7 三田・出石・尼崎

ここに紹介する小坂象堂（1870-1899）、天岡均一（1875-1924）、桜井忠剛（1867-1934）は、それぞれ三田、出石、尼崎の出身です。三田と出石は江戸時代後期から陶磁器の生産が盛んなところで、小坂と天岡もそうした前近代からの産業に関係していたようです。尼崎藩主の家系に生れた桜井の描く《能道具図》には、自身の出自にまるわる思いが隠されているのかもしれませんが。

【常設展示室2】

トピック8 生野三巨匠、こんなにつぎつぎと

白滝幾之助（1873-1960）、和田三造（1883-1967）、青山熊治（1886-1932）といった中央画壇で活躍する画家を相次いで輩出した鉾山の町、生野。「こんなにつぎつぎ」というのは日本全国を見渡しても珍しい事例かもしれません。ここでは、3人による男性肖像画を展示し、それぞれの才能が背負った期待の地平を考えます。

【常設展示室2】

トピック9 作者のいた日々

1977（昭和52）年、当時神戸市長田区在住の榎忠（1944- ）は、毛髪、眉毛、脇の毛など、右半身の体毛を全て剃り上げました。いわゆる「半刈り」。そして、そのままハンガリーに旅行しました。10ヶ月ぐらいうると毛が生えてきたので、今度は左半身を剃り上げました。榎が「半刈り」状態だった1977年から79年にかけての約3年間は、ひょうご近代150年の芸術における画期といえるでしょう。

【常設展示室3】



参考）榎忠《ハンガリー国へハンガリ（半刈）で行く》
1979年／2011年 ゼラチンシルバープリント ※

トピック 10 二中の画家たち

兵庫県立第二神戸中学校（現・兵庫高等学校）は幾人かの著名な画家を輩出しています。中でも昭和の国民画家といえる小磯良平（1903 - 1988）、東山魁夷（1908 - 1999）の二人の存在は圧倒的です。ここでは、同校同窓会組織である武陽会より昨年度ご寄贈いただいた小磯良平、東山魁夷、古家新（1897-1997）、田中忠雄（1903-1995）の作品を中心に展示します。

【常設展示室 3】

トピック 11 タルホ愛

明石に住んで、関西学院普通学部（中学部）に学んだイナガキタルホ（稲垣足穂、1900-1977）の最初の著作『一千一秒物語』は、1920年代のモダニズムの空気を反映しながらも、終生続くタルホの異才ぶりを伝えてやみません。ここでは、カフェ、お月様、シネマなどタルホと同じ語彙を持つ版画家、谷中安規（1897-1946）の作品、1970年代にタルホを再発見することで自作を展開した中馬泰文（1939- ）などの作品を展示します。

【常設展示室 3】



参考）谷中安規《月》1932年 木版・紙

トピック 12 美術館が、できた！

県政100年記念事業のひとつとして建設が進められた当館の前身である兵庫県立近代美術館は、1970（昭和45）年に開館しました。開館当初の収集方針のひとつが、近現代の彫刻と版画の収集でした。常設展示室6の1室全部を使用して、当館収蔵品の中から近現代の彫刻作品の名品を展示し、それに関係する版画作品を展示します。

【常設展示室 5】

トピック 13 小磯良平とひょうご、そして神戸

小磯良平は神戸に生まれましたが、生家と養家は三田藩の重臣の家系でした。ここでは、小磯と三田の関係を端的に示す三田学園所蔵の《放つ》（寄託）を展示し、あわせて1962（昭和37）年10月に、朝日新聞紙上で掲載された「新人国記・兵庫県」の挿絵原画、小磯が東京藝術大学教授時代に新設した版画科に関係の深い駒井哲郎（1920-1976）、中林忠良（1937- ）の版画作品を特別に展示します。

【小磯良平記念室】

トピック 14 金山平三とひょうご、そして神戸

金山平三の父、春吉は淡路島出身。若い頃から神戸に出て、海岸通にある蓬莱舎旅館の番頭をしていました。春吉は、ほぼ全財産をはたいて息子を約4年間のヨーロッパ遊学の旅に出したほか、東京暮らしの平三が帰神した際は、自ら包丁を握って手料理を食べさせたといえます。金山平三にとって、神戸とは父の愛そのものだったかもしれません。ここでは、父春吉と神戸にまつわる作品を展示します。

【金山平三記念室】



参考）金山平三《メリケン波止場（神戸）》1956-60年 油彩・布

トピック 15 いきかうひとびと（1）ふるさと、はなれて

日本画の巨匠、松岡映丘（1881-1938）と橋本関雪（1883-1945）は、それぞれ現在の福崎町、神戸市に生まれましたが、最終的には画壇の中心である京都と東京で活躍しました。対して、村上華岳と小出楠重は、京都にいったん出ながら、あるいは生地である大阪で暮らしながら、それぞれ神戸、芦屋に居を構えることで晩年の傑作をものしました。ここでは、そうした4人の画家の作品と郷里にとどまったまま制作をつづけた森月城（1887-1961）と乾太（1929- ）の作品を展示します。

※森月城、乾太の作品は後期展示（9/4～11/4）

【常設展示室 6】

トピック 16 いきかうひとびと（2）ひょうご、大交流ものがたり

1950年代は、芸術家どうしの交流が盛んな時代です。海外からの情報が絶たれ、芸術的な活動が制限されざるを得なかった戦争期の反動ともいえるでしょう。ここでは、書と絵画に焦点をあて、上田桑鳩（1899-1968）、森田子龍（1912-1998）、吉原治良（1905-1972）、津高和一（1911-1995）らの作品を展示し、50年代から70年代にかけての交流の一端を紹介します。

【常設展示室 6】



参考）森田子龍《蕭々》1965年 墨・紙

※後期展示（9/4～11/4）

トピック 17 いきかうひとびと（3）ブラジルへ

1928（昭和3）年、現在の神戸市中央区山本通3丁目に国立移民収容所が開設され（「収容」の語が不適切なので名称は変化していきます）、南米、特にブラジルへの移住者がここを経てかの地へと渡っていきました。ここでは、戦前にブラジルに移住し、そこで絵を志してグループ「聖美会」を結成し、制作を続けた画家の作品を中心に展示します。

【常設展示室 6】

関連事業

（1）学芸員によるギャラリートーク

7月21日（土）、8月18日（土）、9月22日（土）、10月6日（土）、11月3日（土）

※いずれも午後4時より（所要時間：45分）、1F エントランスに集合 ※参加無料、要観覧券

（2）夏休みこどもスペシャル

詳細未定

※こどものイベント係（tel：078-262-0908）へお問い合わせください。

（3）ミュージアム・ボランティアによるガイド・ツアー

会期中の金・土・日曜の午後1時より（所要時間：45分） ※参加無料、内容により要観覧券

お問い合わせ先

兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

TEL: 078-262-0901 (代表) FAX: 078-262-0903 (代表)

https://www.artm.pref.hyogo.jp

取材・画像提供に関すること

営業・広報担当

TEL: 078-262-0905 (担当直通) FAX: 078-262-0903

展示内容に関すること

小企画「触りがいのある犬一中ハシクシゲ」

担当学芸員：江上ゆか／橋本こずえ

e-mail: egami@artm.pref.hyogo.jp

特集「ひょうご近代150年」

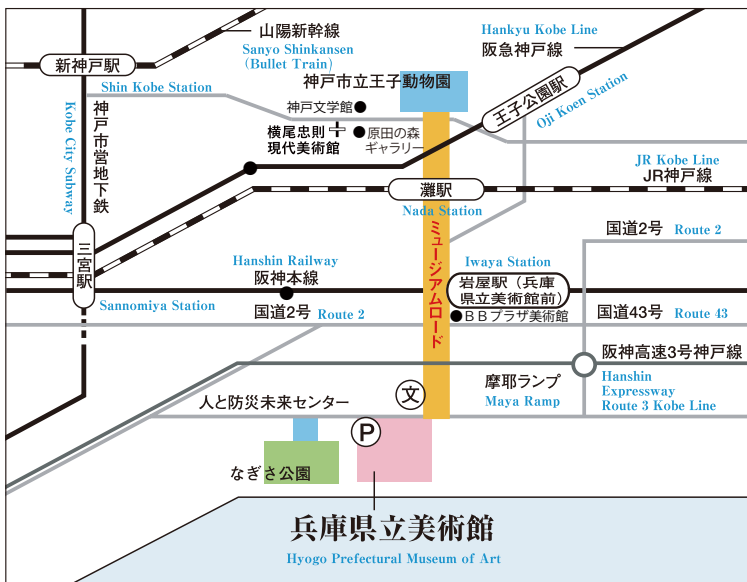
担当学芸員：西田桐子／鈴木慈子

e-mail: nishida@artm.pref.hyogo.jp

TEL: 078-262-0909 (学芸直通) FAX: 078-262-0913 (学芸直通)

【交通案内】

- ・ 阪神岩屋駅（兵庫県立美術館前）から南に徒歩約8分
- ・ JR神戸線灘駅南口から南に徒歩10分
- ・ 阪急王子公園駅西口から南西に徒歩約20分
- ・ JR三ノ宮駅南から神戸市バス（29、101系統）阪神バスにて約15分
HAT神戸方面行き「県立美術館前」下車すぐ
- ・ 地下駐車場（乗用車80台収容・有料）
- *ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください
- *団体バスでお越しの場合は、バス待機所のご予約をお願いします。



広報用画像について留意事項

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。末尾の「申込書」をご使用ください。

- 作品画像を媒体掲載される際には、「申込書」に記載の作家名・作品名・制作年などを必ず入れてください。
- 作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・変更はできません。
- 画像データ使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。それ以外での使用はできません（会期終了まで）。
- 再放送、転載など二次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。
- 基本情報、図版使用の確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で「営業・広報担当」までお送り願います。
- 展覧会場の取材、撮影をご希望の場合についても、「営業・広報担当」までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。
- 本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体（VTR/DVD）、URLなどを、「営業・広報担当」宛てに、1部お送りくださいますようお願いいたします。

広報画像申込書

県美プレミアム 2018年7月7日(土) - 11月4日(日)

小企画「触りがいのある犬—中ハシクシゲ」 特集「ひょうご近代150年」

※ご希望の画像の番号に○をつけてください。後日データをお送りいたします。

-
- 1 制作途中の「触りがいのある犬」に触れる
-
- 2 福田翠光《鶴(カフノツル)》1940年 絹本着彩
-
- 3 島袋道浩《そしてタコに東京観光を贈ることにした》2000年
パフォーマンス/ビデオ・インスタレーション ©Shimabuku
-
- 4 川西英《古道具屋》1941年 木版・紙
-
- 5 吉見敏治《JR新長田駅前(神戸市長田区)》1995年 木炭、コンテ、パステル、水彩、グアッシュ・紙
-

※上記の画像を媒体掲載される際には、前頁「広報用画像について留意事項」をご一読ください。

●貴媒体についてお知らせください。

○貴社名：

○媒体名： (新聞・雑誌・ミニコミ・TV・ラジオ・ウェブサイト・その他)

○ご担当者名：

○メールアドレス：

ご連絡先 ○電話番号：

○FAX番号：

○ご住所： 〒

○URL：

○掲載・放送予定日：

○画像到着希望日：

○読者・視聴者プレゼント用招待券： 組 名 様分を希望

(最大5組10名まで。本展を媒体で紹介いただける場合に限ります)